ふるさと応援団員からの便り

風土に根ざした物語を

横山充男
大阪府在住
昭和28年生まれ

小京都四万十ジュニア駅伝大会の取材を兼ねて、ふるさと中村に帰省した。小雪のちらつく大変な寒さだったが、こどもたちは元気に疾走していた。天神橋通りにはたくさんの応援客もくりだし、おおいに盛り上がった。懸命に走るこどもたちの姿は、目頭が何度も熱くなるほどの感動であった。こんなすばらしい取り組みを、多くの人々に知ってもらいたい。そんな思いをこめて、ジュニア駅伝大会を題材にした少年小説を書いた。この秋に出版予定である。

わたしは宿毛市平田町で生まれたが、一歳になる前に中村へ引っ越している。高校卒業まで中村にいたので、人生の基本となるところは、すべてこの町の人々と風土に育んでもらった。そのせいか、出版した物語の多くは幡多地方の風土を背景においている。とくに震災と原発事故があって以降、いっそう自然と風土のことを考えるようになった。

こどものころの楽しかった思い出のひとつに、不破の八幡さんのお祭りがある。そこから着想した少年小説が、この四月に出版される。『夏っ飛び！』という題の作品で、四万十川を舞台にしたものだ。自然の美しさときびしさを、少年たちが心と体で体験し成長していく現代の物語である。

一年を通して、四万十市の人たちはさまざまな祭りと催しをやっている。いちじょこさん（一條大祭）のような伝統的な祭りや催しだけでなく、四万十川花絵巻、土佐一條公家行列、しまんと市民祭、四万十川水泳マラソン、四万十川ウルトラマラソンと切れ目なく続いていく。こうした催しを支えている人々のご苦労は大変なものだろうが、同時に市民の熱意なくしてはできないことでもある。それはまた、四万十川を中心とした風土があるからこそできることでもある。こどもたちはそんな中で育っていく。

ジュニア駅伝大会の取材のあと、幼なじみたちと一杯やった。四万十市の人たちが、どれほどすごいことをやっているかを、外から見ているわたしの立場で語った。だが、幼なじみたちはぴんとこなかったようである。みんなそれぞれの立場で、こうした催しに協力しているらしいのだが、それは当たり前のことで特別なことではない。そんな思いらしい。

他所で暮らしてみるとわかるのだが、幡多の人たちは独特の感性と価値観をもっている。やっていることもユニークでおもしろい。それはかなり誇れることであり、広く外にむかって宣伝していいことである。だがひょっとすると、それは「他所で暮らしている幡多人」が担うべき仕事なのかもしれない。そんなことを考えながら、次の作品の構想を練り始めている。

（作家）